

## 「正解はひとつじゃない」——基礎法学というオアシスのその先に

出口雄一

法学部法律学科 教授

日本法制史のゼミですが、ゼミ生の学びたい内容に応じて柔軟に課題図書を選び、3・4年生が合同で課題図書の輪読・討論を行います。

学部生時代には、正直に言えばあまり法学という学問にはなじめなかった記憶がありますが、その中でもいくつか、面白いなと感じた講義がありました。その一つが、履修した当時にはその後、今に至るまでつきあうことになったとは思っていなかった日本法制史でしたが、もう一つ強い印象を持ったのが法哲学でした（当時は「法理学」という科目名でした）。

法制史も法哲学も、いずれも基礎法学に分類される学問です。もちろん、今となつては法解釈学（実定法学）の奥深さも遅ればせながら理解できるようになり始め、学部時代にきちんと学んでおくべきだったと後悔することしきりなのですが、当時の自分を振り返ると、通説と判例を中心に展開される法解釈学が、裁判所において適用される「正解」を念頭に置いた、いささか窮屈なものに見えていたのではないかと思います。法解釈学がこのように振る舞うことの意味を理解するには、能力が追いついていなかったということ

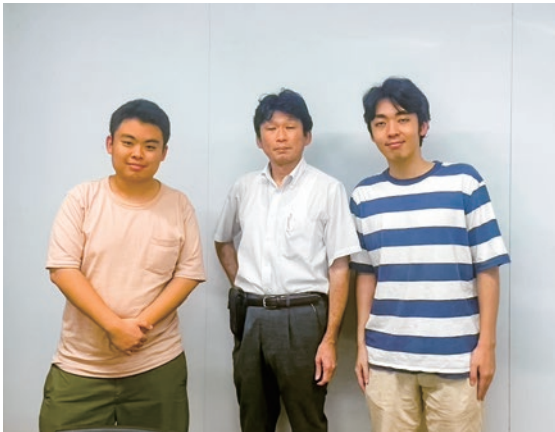
でしょう。

そのような不真面目な法学部生だった自分にとって、基礎法学は「正解はひとつじゃない」という自由さを味わわせてくれる、オアシスのような学問でした。思いついたことをまずは言語化してみる、というところに、なんらかのカタルシスを感じていたのかもしれない。その自由さの先に、自分が語ろうとしていることの基盤を自分自身で用意しなければならないということ、つともないハードルがあり、そして、「法」について語る以上は、どこかで「正解」を予定する法解釈学と切り結ぶ必要があるということに気づいて慄然としたのは、大学院に進んでからのことです。どちらのルートをたどつても、どこかで学問の困難さに直面するわけです。ゼミ生の皆さんには、まずは自由に自分の思いつきを言語化してもらうようにゼミを運営していますが、人生のどこかで、自分が発話したことの意味付けについても振り返ってもらふとよいな、という希望も持っております。

### 議論を通じた学びの楽しさ

おさ り け い し  
長利啓志君 法学部法律学科3年

当ゼミでは、毎週書籍の輪読を行い、教授にその内容を解説していただき、ゼミ内で解釈などを巡り討論します。「日本法制史ゼミ」と銘打たれている当ゼミですが、その枠組みにとらわれず、西洋法、西洋哲学、イスラーム法などを扱った多種多様な書籍を輪読しています。人数の少ないゼミではありますが、それゆえに学生一人一人がより濃密に学ぶことが可能です。それぞれの興味に沿ったトピックを取り上げることで、その題材についてゼミ員全員を巻き込んで議論することができます。他にはない学習と議論の機会の存在、それがこのゼミの最大の魅力です。



# 呼吸器疾患に悩めるすべての患者さんのために

ふくなが こういち  
**福永興壹**

医学部 教授

内科学（呼吸器）教室は喘息・アレルギー、肺癌、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、感染症、睡眠時無呼吸など呼吸器疾患に悩める患者さんのために診療、研究に積極的に取り組んでいます。

慶應義塾大学医学部内科学（呼吸器）

教室（以下、慶應呼吸器内科）では、呼吸器疾患に苦しむすべての患者さんのために、医局に集う各人が多様性を尊重しながら自らのキャリアを形成し、その能力を一枚岩のごとく結集して挑戦を続けています。慶應呼吸器内科が目指す医療への姿勢としては、質の高い医療の提供、革新を追求する精神、そして協力を重んじることを大切にしています。さらに、医局員と共有する重要な信条として「4つのF: Faith・Fast・Fair・Fun」を掲げています。これは、信念と信頼の心を持ち、迅速な行動を心がけ、公平性を忘れず、どのような環境でも楽しく働くことを意味します。この価値観のもと、呼吸器内科の発展と成長に努めています。

また、私たちは、患者さん一人一人の状態に合わせた適切な医療を提供し、確かな信頼と安心を築くことを目標としています。早期診断と効果的な治療の実現を目指し、最新の医学知識と技術を駆使し、新たな解決策を生み出す

ために挑戦を続けています。

これを具現化するために、私たちの教室では、喘息・アレルギー、肺癌、COPD、感染症、睡眠時無呼吸など幅広いテーマで呼吸器疾患の病態解明に努めています。それぞれのテーマの指導教員は、学生が興味を持つ多様なテーマに対し、的確なアドバイスをを行い、さらなる探究を支援しています。これに加えて、基礎医学教室のみならず、他学部や企業と連携しながら研究を推進しており、最新の医学知識や技術の活用にも積極的に取り組んでいます。こうした研究活動を通じて、常に新たな知見を得ることを目指しています。

呼吸器内科学の未来を担う若手医師や研究者が、専門性を深めながら多様な視点を持ち、医療の発展に寄与することを期待しています。これからの時代に求められる医療従事者として、革新と挑戦の精神を持ち続け、患者さんの生活の質向上に貢献していくため、慶應呼吸器内科は一層の発展を目指して邁進していきます。

## 臨床と研究をつなぐ Physician scientist を目指して

おおたけ しろう

**大竹史郎君** 医学研究科博士課程4年

私は大学院博士課程4年生で、主にCOPDと腸内細菌の関連について基礎研究を行っています。東京農工大学食品機能学研究室に共同研究へ参画していただき、マウスモデルを用いて喫煙曝露が腸内細菌叢やその代謝産物である短鎖脂肪酸に与える影響、さらにはCOPDの病態への関与についての研究に従事しています。また呼吸器内科の臨床医としての経験を生かし、COPDや新型コロナウイルス感染症に関する臨床研究にも注力しています。将来的には臨床と基礎の両方の視点からCOPDの病態理解や新たな治療法の開発に貢献できることを目指しています。教室内にはそのほか感染症・悪性腫瘍・アレルギーといったさまざまな分野で卓越した研究が行われており、他分野との交流を通じて多角的な視点を養える環境が整っています。

